

Eric Davis,

Memories of State: Politics, History, and Collective Identity in Modern Iraq

Berkeley: University of California Press, 2005, xiii + 385pp.

さか い けい こ
酒 井 啓 子

はじめに

米英軍の軍事攻撃から3年余を過ぎたイラクでは、スンナ派対シーア派の宗派対立が激化している。従来西欧のオリエンタリストによる研究は、イラクやレバノンなどの宗派的多元性をもった中東の社会をモザイク社会とみなして宗派対立を前提とした議論を展開してきたが、1970年代以降はそうした視角を批判する研究が主流となり、いかにオリエンタリスト的認識と決別するかが模索されてきた。こうした研究は、宗派やエスニック要因を本質的なものと捉えず、社会階級対立、経済格差問題、あるいは国際環境のなかでの動員要素としてみなすことに力点を置く。しかし現在、実際に宗派対立が発生するなかで、宗派やエスニック的差異を超越する社会経済的統合要因を指摘する声は薄れがちだ。

さらにそこから派生する議論として、中東における強権政治の存続や市民社会の不在の原因を中東社会の後進性ゆえの必然とみなし、分裂的社会を統合するためには強圧的な権力集中はやむなしとする一般論がある。実際、イラク戦争前のバース党政権のみならず、エジプトやシリアなどの長期独裁政権の存在が、中東社会の内在的問題の一種の証明として取り上げられることが増えている。

換言すれば、現在の中東諸国の「専制」ともみえる権威主義体制の長期化、宗派対立の深化を、過去のオリエンタリスト的通説に陥ることなく説明する

ためにはどうすればよいのか、という深刻な問題を、中東研究は抱えている。階級分析、社会経済的要因のみに基づいた分析ではこれらの事象が説明できないとなれば、いかなる分析手法が適切なのか。

すでに権威主義体制の耐久性、安定性に着眼した研究は、近年いくつか発表されている。Albrecht and Schlumberger (2004) はエジプトなどの権威主義体制がコオプテーションを有効に利用して長期安定政権を維持していると指摘している。同じ年に出版された酒井・青山 (2005) と Posusney and Angrist (2005) は、いずれも権威主義体制の安定性、堅ろう性の原因解明に焦点を当てている。

このような傾向のなかで本書は、イラク現代史における政治エリートの歴史的記憶の操作に着目し、国家の社会統治がどのような環境のもとで有効でありどのような条件のもとで統治不能に陥るのかを解明しようというものである。

本書の構成と個別論点の特徴

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 序章
- 第2章 イラク知識人と現代の歴史的記憶の形成
- 第3章 ナショナリズムと記憶、王政の衰退
- 第4章 記憶と知識人、市民社会の矛盾 (1945～1958年)
- 第5章 試練 1958年7月14日革命と歴史的記憶をめぐる闘争
- 第6章 国家の記憶の高揚 (1968～1979年)
- 第7章 国家の記憶の退潮 (1979～1990年)
- 第8章 国家の記憶と抵抗の技
- 第9章 国家の記憶と人民の記憶? 湾岸戦争後のイラク
- 第10章 結論

本書はイラクの国家・社会間関係の分析においてまず、グラムシのヘゲモニー論を適用する。最終章でも繰り返し強調されるが、イラクで権威主義・一党独裁体制が何故ある期間有効な国家統治を行っていたのかを解明するにあたっては、国家の正統性の独

占や強権の支配によって説明するよりも、政治エリートがその価値観、規範概念を民衆の間に浸透させ合意を得ると考えるヘゲモニー概念のほうが、説明可能だとする。1968年に成立したバアス党政権は、イラン・イラク戦争（1981～88年）半ばまでは知識人エリートの取り込み、大衆の国家意識形成を積極的に行うことで、ヘゲモニーの支配を確立および制度化し、それによって単なる強圧的政治支配のもつ脆弱さを回避したが、80年代後半以降は相次ぐ戦争により国民統合のための求心的論理が拡散、自己矛盾を抱えるものとなり、さらに一族支配の深化によってポピュリズムの性格が喪失された。以上が著者の結論である。

分析対象の中心はバアス党政権（1968～2003年）であるが、それに先立ち著者は、第2章から第4章で、建国（1921年）後のイラク国家の形成過程と、そこで展開された複数の国家建設イデオロギーの対立とそれぞれの文化政策を追う。主としてイラク一国の国民統合を核としたイラク・ナショナリズムと、イラクを超越したアラブ民族の統合に重点を置くアラブ・ナショナリズムの相克が論じられ、両者による歴史的記憶の喚起手法を比較する。アラブ・ナショナリズムが歴史のなかのアラブ性、イスラーム性などを動員して、ナショナリズム思想の核に据えることに熱心かつ成功したのに対して、イラク・ナショナリズムを掲げる左派リベラル系の諸政治組織やイラク共産党などは、そうした独自の「イラク国家」の歴史的記憶を創造することに積極的ではなく、むしろ国際主義的、西欧近代主義志向を強調したとの指摘は、興味深い。通常イラク共産党とバアス党の権力抗争として論じられる、1950年代以降の政治エリートにおけるイラク一国主義とアラブ・ナショナリズムの確執に関しては、後者の歴史的記憶の操作における巧みさに着目した点が本書の特徴だ。特にイスラエル建国をめぐる、民衆のアラブ意識の高揚をアラブ・ナショナリズムが効果的に拘い取ることによって成功した一方で、共産党はそのソ連との関係から十分な対イスラエル批判を行えなかったとの例が挙げられる。

第5章では、イラク共産党が支えて成立したカー

スィム政権（1959～63年）が、何故短命に終わったのかに焦点を当てる。その原因としてカースィム政権が知識人の取り込み、組織化を行わなかったことを指摘している点が、興味深い。著者は、カースィム政権はグラムシによるところの「有機的知識人」を形成しなかった、と述べているが、最も宗派的、エスニック的に偏向のない政権であったこと、国家暴力の行使の少ない政権であったことなどの長所をもちながら、権力の制度化がなされなかったため短命に終わった、とみなす。

この点こそが、次に続くバアス党政権との大きな相違点である。第6章では、バアス党政権がいかに国家の記憶を創造し知識人の営為を通じて社会に定着させていったか、に焦点が当てられる。バアス党政権は特に若年世代の間での支持層の確立を目的として、「歴史の書き換え」を国家事業として実施し、そこでは党が党是と掲げるアラブ・ナショナリズムとイラク一国の国家統治理念との矛盾が生じないように、巧みな歴史観が確立されていった。その事業に学界、知識人は全面的に動員され、文化学術活動、出版事業が推進され、考古学、民俗学の発展、伝統芸能の保護が進められた。

第7章が扱う湾岸戦争までのフセイン政権時代もまた、こうした文化政策が継承されるが、「退潮」と題されたことからわかるように、その歴史的記憶の形成にさまざまな矛盾と亀裂の種を抱えざるを得なくなっていく。イランにおけるイスラーム政権の成立とイラン・イラク戦争の長期化のなか、フセイン政権はより強固な国民動員論理の確立を必要とするとともに、交戦国イランに対抗してアラブ性を再度強調する議論が強められる。特に著者は後の宗派対立の深化をもたらす種として、この時期の純粹アラブ性への偏重を指摘する。アラブ・ナショナリストはカースィム政権時代から、イラク共産党に対する形容として、シュウビーヤ（shu ūbiya）という反アラブ的性格を意味する用語を使用してきたが、同じ用語が1979年以降は専ら、シーア派住民をペルシア起源とみなしてその非アラブ性を糾弾する目的に使用されたことを、著者は強調する。

第8章は、こうした国家統治の手段として起用さ

れた知識人が、バース党の政策に対していかに対応したかに焦点を当てる。そこでは学術活動の多くが政治性を帯び歴史解釈が偏向していく過程が指摘されるが、同時に実際にはフセイン政権の歴史社会認識と矛盾する研究も存在することを挙げる。こうした点に、一方的な知識人、民衆に対するイデオロギー的強圧のみによる支配ではなく、国家と知識人の微妙な交感関係をみるからこそ、著者はバース党政権の分析にヘゲモニー論が有効と主張するのである。

国民統合論理の矛盾が一気に噴出し、バース党/フセイン政権がその統治術に破綻をきたすのが、湾岸戦争とその後の全国的な反政府暴動（インティファダ）である。第9章は、インティファダによって大衆の圧倒的な離反をみたフセイン政権が初めて宗派差別政策を導入し、そのことが決定的な宗派分断を生んだと指摘する。文化政策や歴史認識の操作を通じた国家統治政策は続けられたものの、それが政権として自己防衛的となっている点が1980年代以前と決定的に異なるとの発見は、興味深い。イラク国民統合のための包括的レトリックは薄れ、政権維持を主眼とするばかりにインティファダでの叛徒を本質的に劣等な住民として切り離す議論が展開されたのである。ポピュリズムを標榜し、民衆の最大限の取り込みのための論理立てを構築してきた1970～80年代のバース党の文化政策との差異を指摘することが、本書のなかでは最も重要な論点である。そして「叛徒＝貧しく遅れた南部湿地帯の住民」を切り離すことで、フセイン政権はシーア派住民のなかでの動員対象を都市中間層に限定した、と著者は述べる。

これは、イラク戦争後に進行しているシーア派社会の政治社会的展開を考えると、極めて重要な指摘である。イラク戦争後、米政権は戦後のイラク政権における宗派的エスニック的バランスに配慮しつつ、主として都市中間層、知識人エリートを動員しようとした。その計画が頓挫したのは、都市および地方農村の貧困層を支持基盤とした、サドル潮流に代表されるようなシーア派イスラーム主義勢力の反米活動ゆえである。フセイン政権がその末期に支持基盤を都市中間層に限定せざるを得なかったことは国内

統治能力の脆弱化の証左である、との本書の指摘を踏まえれば、米政権の戦後のイラク政権構想の失敗はフセイン政権の統治政策の失策をそのまま踏襲したことになる。

ところで同章の後半で著者は、湾岸戦争後の反フセイン派の在外知識人の議論をいくつか摘出し、反フセイン派による歴史再解釈、包括的な市民社会構築の試みを指摘しているが、戦後の展開をみれば、フセイン政権期に変わる新たな国家の記憶の構築の方向性はみえていない。著者の潜在的期待に反して、国家の記憶構築の試みが全く不在ないし混乱していることが、戦後のイラクにおける宗派的、エスニック的差異の固定化を生んでいる。

既存研究との比較，独自性

バース党政権における歴史の書き換え、シンボル操作などの統治手法を分析した研究は、これまでも多くなされている。代表的なものはイスラエルの研究者アマツェア・バラムやサミール・ハリール（本名カナアーン・マッキーヤ）による著作 [Baram 1983; 1991; Khalil 1989; Makiya 2004] であり、特に前者は本書で指摘されるバース党政権のメソポタミア主義を最初に指摘した研究者である。だが本書はこうした既存研究と、主として以下の2点において一線を描くことを企図している。第1に、バラムに代表されるイスラエルならびに欧米のイラク研究に一般的な、イラク社会の宗派的、エスニック的多元性を本質的な存在として固定化する視点を排すること。第2に、ハリールに代表される在外イラク人知識人の一部にみられる、バース党/フセイン政権が専ら暴力のみによって統治されてきたとみなす視点を排すること。無論、「多元的なイラクを統治するためには権威主義的支配が不可避である」、あるいは「権威主義体制を招来しないためには統合困難なイラク社会は宗派、エスニック別に分断統治することが必要」といった、冒頭に指摘したような安直なオリエンタリズム的分析への回帰は、否定される。

こうした分析視角は、十年前に著者が編んだ前作

[Davis and Gavrielides 1991] から連続するものである。国家統治術 (statecraft) に注目した著者は、前作ではイラクのみならず湾岸首長制諸国やリビアなどの権威主義体制を含めて、国家・社会間関係を単なる対峙関係ではなく国家による社会の動員という側面に着目して、国家主導の伝統の創成、民衆文化の再解釈過程を分析した。そこで分析対象となったのは専ら産油国で、従来レンティア国家論、部族社会論などで説明されてきた政権の継続性、統治安定性を、新たな視角から説明しようとしたものである。本書もイラクという産油国を対象としたもので、レンティア国家論の延長に置かれているともいえるが、前作より一層権力論に踏み込んだ議論となっている。中東諸国における権力装置の特徴を石油や部族 (パトロン・クライアント関係) といった中東社会の特質性に帰するのではなく、より一般化して理論化しようとの試みが、本書では一層強く打ち出されているといえよう。他の中東諸国の国家・権力分析に十分適用可能な理論の提示となっている。

最後に特筆すべき点は、著者が分析対象としている多くの出版物がフセイン政権下で出版され、国外ではなかなか流通していない史料だという点である。前述したマッキーヤを含め、フセイン政権に批判的なイラク人知識人の多くは、こうしたフセイン政権の検閲不可避の国内出版物を政治的思想的に偏向したものとみなし、分析対象にすらしなかった。他方イラク国外の欧米研究者は、イラクが長らく対外交流において閉鎖状態にあったことから、そうした史料へのアクセスをもっていない。著者はさまざまな形で1970~90年代のイラク国内出版物の収集に尽力し、貴重な分析を生み出す結果となった。

フセイン政権期の疎外状況のなかで、国内研究者のもつ史料の豊富さと国外研究者の優れた分析手法との間に接点がないままにイラク研究が進められてきた、ということは大きな問題である。統制下にある出版物を分析対象にする手法が有効であることを著者が示した以上、従来のイラク研究において光を当てられることの少なかった国内出版物の解釈、分析に今後はより力が注がれてしかるべきであろう。

湾岸戦争、イラク戦争によって多くの国内出版物、史料が紛失、焼失したと伝えられるが、日本でもアジア経済研究所図書館などを始めとしてこの時期の史料をある程度収集、保管している。改めて1970年代以降イラク戦争までの未活用史料を体系的に分析することの重要性を、本書は示している。

文献リスト

< 日本語文献 >

酒井啓子・青山弘之編 2005. 『中東・中央アジア諸国における権力構造 したたかな国家・翻弄される社会』アジア経済研究所叢書 1 岩波書店.

< 英語文献 >

- Albrecht, Holger and Oliver Schlumberger 2004. " "Waiting for Godot": Regime Change without Democratization in the Middle East. " *International political science review* 25(4)(October): 371-392.
- Baram, Amatzia 1983. " Mesopotamian Identity in Ba' th Iraq. " *Middle Eastern Studies* 19(4): 427-456
1991. *Culture, History, and Ideology in the Formation of Ba' thist Iraq, 1968-89*. New York: St. Martin's Press.
- Davis, Eric and Nicolas Gavrielides eds., 1991. *Statecraft in the Middle East: Oil, Historical Memory, and Popular Culture*. Miami: Florida International University Press.
- Khalil, Samir 1989. *Republic of Fear: The Politics of Modern Iraq*. Berkeley: University of California Press.
- Makiya, Kanan 2004. *The Monument: Art and Vulgarly in Saddam Hussein's Iraq*. London: I. B. Tauris.
- Posusney, Marsha Pripstein and Michele Penner Angrist eds. 2005. *Authoritarianism in the Middle East: Regimes and Resistance*. Boulder, Colo.: Lynne Rienner Publishers.

(東京外国語大学大学院地域文化研究科教授)